

海外

k a i g a i

日本語

n i h o n g o

教育

k y o i k u

研究

k e n k y u

第16号  
2023年6月

## 海外日本語教育学会 設立趣意書

日本語教育は世界各地で多様に変化しながら行われています。海外日本語教育学会は、海外の国や地域の日本語教育の歴史や実情をよく知り、学習者に寄り添った日本語教育を追求していきます。また、海外の日本語教育現場が抱えているさまざまな課題について解決策を探り、情報を広く共有するために発信していきます。

海外日本語教育学会は、各国や地域の歴史に根ざした、多様な言語、文化および価値観を尊重します。わたしたちは平和な国際社会の構築につながる日本語教育を追求し、学びあうことによって、日本語教育の現場を中心とした世界各地にその研究成果を還元していくことを目指します。

具体的な活動として、以下の3点を発信し、共有することを柱とします。

- 1) 海外の国や地域に固有の日本語教育の実態調査および研究
- 2) 海外の国や地域の現場で培ってきた教育方法や教室活動の実践報告および研究
- 3) 海外の国や地域の史的背景にもとづく日本語教育のあり方についての研究

世話人：新井克之、荒川友幸、蟻末淳、鶴澤威夫、内山聖未、黒田直美、小林基起、  
近藤正憲、佐久間勝彦、瀬尾匡輝、高嶋幸太、星亨、三浦多佳史、三原龍志、  
村上吉文、村木佳子、谷部弘子（五十音順）

### 現在の学会組織 (\*は委員長)

会長：谷部弘子

副会長：小林基起

事務局長：高嶋幸太 会計：高嶋幸太

例会委員会：新井克之、荒川友幸、近藤正憲\*、村上吉文、村木佳子

広報委員会：鶴澤威夫\*、星亨、三浦多佳史

学会誌委員会：蟻末淳、内山聖未、黒田直美、瀬尾匡輝、三原龍志\*

学会誌本号担当査読委員会：新井克之、蟻末淳、内山聖未、黒田直美、小林基起、  
近藤正憲、佐久間勝彦、高嶋幸太、星亨、三原龍志、村上吉文、谷部弘子

名誉会長：佐久間勝彦

# 目次

## 【巻頭辞】

“海外日本語教育学”の視座、その見つめる先

新井 克之 .....01

## 【報告】

ブログ「忘れられないあの教室」開始 [広報委員会] .....02

開催した研究例会 [例会委員会] .....02

「ウクライナ学生支援会（JSUS）の挑戦

—ウクライナ避難民支援における日本語学校の役割と提案—

平岡 憲人 .....04

中東・北アフリカ日本語教育シンポジウム JLEMENA2023 [学会誌委員会] .....08

海外の日本語学習者作成のビデオクリップ上映会 [学会誌委員会] .....09

『海外日本語教育研究』投稿規定・執筆要領 .....11

編集後記 .....15

## “海外日本語教育学”の視座、その見つめる先

新井克之

霊長類学者として、ゴリラの研究で著名な山極寿一氏によると、ヒトはゴリラと比較して「ことばを話すこと」、そして「教えること」において大きな特徴を持つそうです。

とすると、日本語教師のような語学教師は、まさにこの二つの根源的なヒトゆえの特徴にもとづいた日常生活を送っているといえそうです。また山極氏によると、この「教えること」とは自分の子どものみではなく、他者にも教えることにヒトとしての特徴があるそうです。もし、そのように仮定するならば、ヒトが「海外」において、全くの他者であるヒトに日本語を教える。いったいその意味とは何でしょうか。そのような前提にもとづくとしたら、わたしたちはどのようにして“海外日本語教育学”に取りくむべきでしょうか。そこで、海外日本語教育学会の設立趣意書を振りかえってみると本学会の活動の柱は以下の3点です。

- 1) 海外の国や地域に固有の日本語教育の実態調査および研究
- 2) 海外の国や地域の現場で培ってきた教育方法や教室活動の実践報告および研究
- 3) 海外の国や地域の史的背景にもとづく日本語教育のあり方についての研究

1)では、海外日本語教育が行われている「現場」の実態、つまり、海外におけるどのような人たちがどのような土地で、どのように日本語教育を行っているかを「現場ならではの視点」に立って調査・研究すること指します。2)においては、その「現場」ならではの教育方法や教室活動の実践について調査・研究します。そして、3)では、一見、言語教育とは関わりが薄いその「現場ならではの背景」を過去から現在にむけて掘りさげしていくことで、「より良き未来」へ向けた海外日本語教育のあり方を提示することを指します。

以上を振りかえってみると、わたしたちの研究活動における原点とは、「現場ならではの視点」ではないでしょうか。そして、これこそがまさに“海外日本語教育学”特有の視座といえます。またそこで見失ってはならないのは、言語学習にまつわる研究活動においてデータを扱う上で不可欠な数値の基準となる「ものさし」の精度よりもむしろ、本来は、人間が人間らしく人間的な行動に関わるものを探求しているという大前提なのではないでしょうか。ヒトはなぜ言語を話し、かつ、なぜ全くの他人にまで何かを教えるのか。なぜそのようにして人間社会が育まれていくのか。その答えについて、ここで2012年のリオ会議でのホセ・ムヒカ氏のスピーチの引用が許されるのであれば、次のように答えたいです。なぜなら「私たちは発展するために生まれてきているわけではありません。幸せになるためにこの地球へやってきたのです」。ムヒカ氏の示唆するような前提に“海外日本語教育学”も、一度立ち返ってみてはどうでしょうか。

しかし、残念ながら2023年現在、世界は「幸せ」や「幸福」からは、ほど遠い現状です。かつては「幸福」に満ちていた海外

日本語教育現場の環境が理不尽な暴力により破壊され今や消滅している事例すらあります。当然のことではありますが、わたしたちは誰も、どこかの誰かの「発展」の犠牲となってはならないのです。

筆者自身も現在国内にいながらして、アフガニスタン、ミャンマー、そしてウクライナから来日した日本語学習者に日々接しています。戦争や内戦、紛争といった暴力から逃れ、かつて幸せに暮らしていた愛する家族を現地に残したまま、ここ日本で日本語を学習する彼らとの日常的なコミュニケーションは、正直にいえば、(少なくとも私にとっては)当初に思っていたほど、生やさしいものではありませんでした。白状すれば、何もかも投げ出したい瞬間すらあります。そのような「葛藤」は、現在の筆者にとってはそう簡単に表現できそうにありませんし、学習者にとっても私以上の語り得ぬ何かがあるのかもしれない。

そう簡単には言葉にはできないような事象やそう簡単には解決が難しい問題が私たちの暮らす社会には日々積みかさなっています。“海外日本語教育学”も含めた「学術」とはそこに存在する問いに対する解決にむけて少しでも貢献するべきなのではないでしょうか。

しかしながらその「学術」を標榜する研究会に参加している私はその議論の前に、かえって、私の内部になぜか白々くなるような気分になる瞬間が芽生えることを、ここで白状します。それは、ひょっとしたら壇上に立つ「エリート研究者」と自分との「育ちの違い」のようなものかもしれません。かつて「現場」にまみれていた自分との違い……熱帯、湿度、瑞々しいフルーツ、汗、蒸気、香辛料の入り交じったにおい、クラクション、ノイズ、怒号、笑い声、スコール、お茶の湯気、昼寝、夕方の心地よい風、ラジオの音楽、満点の星空、満面の笑顔、停電、そしてそこにふと立ち現れる、日本語教室空間……研究会の議論を聞いているうちに、現地にどっぷり浸かっていたかつての自分と、研究会の語り手の作りだす理想的な「世界観」が、まったくの異世界に思えてきます。エリートが生み出すそれは、クーラーの効いたオフィスから生み出される世界観、理想郷にむけて選ばれた言語、無駄のないことばによって編み込まれた一見美しい世界観が私の内部を侵食していきます。

世界の言語は現実的には、何千種類とあり、多種多様でより雑多、より土臭く、そして、より彩り豊かです。このような複雑で多様な世界が、一部のエリートが描く理想郷によって追いやられてはなりません。それゆえ、本来ならばもっと“海外日本語教育学”らしい視座を持った研究や議論を世界は必要としているのです。

いまこそ、人々の「発展」よりも人々の「幸福」に寄与する“海外日本語教育学”を。まずは、現場ならではの視座に立ちかえって、太陽の下で、汗と泥にまみれながら、一步一步、足を踏み出したい。あらためて、そう思うのです。

報告

## ブログ「忘れられないあの教室」開始

・昨年(2022年)12月より学会公式ブログ『忘れられないあの教室』を開設しました。このブログは様々な地域での、ある時代における日本語教育の現場の体験やそれに関わる見聞を、世界の日本語教育の貴重な記録、記憶として、風化させることなく残すために、当事者としての日本語教師が一人称のモノログ形式で綴る、文字によるライフストーリーです。できるだけ多くの地域の現場からの、生の体験を共有する事を目指しています。更新は月一回程度の不定期ですが、これまでに、以下の投稿が公開されています。

- 第1回 「人生で最初の日本語授業」(1980年 アメリカ)
- 第2回 「日本語教師の夢の授業」(2000年 韓国)
- 第3回 「日本語教師 危機一髪 1」(1990年 バングラデシュ)
- 第4回 「日本語教師 危機一髪 2」(1990年 バングラデシュ)
- 第5回 「日本語教師 危機一髪 3」(1990年 バングラデシュ)

ブログは「海外日本語教育学会フォーラム公式ブログ班」(メンバーは23年6月現在12名)によって運営、管理され、執筆は同メンバーのほか、学会員や広く一般読者からの投稿も受け付けています。

ブログ「忘れられないあの教室」リンクはこちらです。

<https://wasurerarenaikyoushitsu.blogspot.com/>

投稿は下記あてに「ブログ投稿」の件名で、実名をお願いします。

E-mail [kgnk.info@gmail.com](mailto:kgnk.info@gmail.com)

報告

## 開催した研究例会

・2022年度第3回研究例会を2023年2月18日(土)16:00-18:00にオンラインで開催しました。

2022年度は、概ね、政治的な変動によって大きな影響を受けることを避けられない日本語教育の現場を取り上げることを一つのテーマとして、研究例会を企画しました。第1回中国、第2回ミャンマーに続き、第3回にウクライナを取り上げました。その概要は下記のとおりです。

### 「ウクライナの日本語教育 —戦争勃発と日本語教育現場の模索—」

第1部 『ウクライナの日本語教育—主に開戦前の日本語教育について—』

ロシアによる侵攻以前のウクライナの日本語教育の実情についてお話いただきました。

発表者：片岡浩史(大阪経済法科大学(元ウクライナ国立キエフ大学))

第 2 部 『訪日したウクライナ避難民に対する日本語教育 ウクライナ学生支援会』  
ウクライナ避難民の支援としての日本語学校での日本語教育についてお話しいただきました。

発表者：平岡憲人(ウクライナ学生支援会 (JSUS) 代表)

・2023 年度第 1 回研究例会を 2023 年 6 月 10 日 (土) 9:30-12:00 にオンラインで開催しました。

コロナウイルスへの対策が漸く収束の動きが見える昨今、今年度の例会の方針としては、「コロナ後の世界の日本語教育」をテーマとして企画する方針です。その方針のもと、第 1 回研究例会では、「AI と海外の日本語教育」と題して、コロナ禍に急速に進んだ人工知能の発展の影響を、海外の日本語教育現場での実践者にお話しいただきました。

### 「AI と世界の日本語教育」

第 1 部 「日本語教師が Chat GPT を使ってできること」

カナダ在住の発表者が、ChatGPT を使って日本語教育に取り組むようになったきっかけ、Chat GPT を使用する際の留意点について、また、その効果についてもお話しいただきました

発表者：石川比奈子 (カルガリー大学助教授)

第 2 部 「南インドの日本語教育界における ChatGPT に対する受け止め方」

発表者は南インドの日本語教師向けに、人工知能を活用した語学教育の影響について情報発信しています。今回の発表では、インドで行われたワークショップに参加したインド人日本語教師の反応のご紹介のほか、今後の課題に対する解決方法をご提案いただきました。

発表者：村上吉文 (国際交流基金日本語アドバイザー・当学会世話人)

\*\*\*\*\*

この発表に続き、6 月 18 日(日)に「生成 AI と日本語教育の未来」というタイトルのオンラインライブイベントが Facebook ページによる配信で行われました。これは、上記村上氏がニュージーランドのカンタベリー大学人文学部教員の荻野雅由氏と対談する形式で行ったもので、録画はこちらの URL から見られます。

<https://www.facebook.com/masa.ogino/videos/1436605617114782/>

\*\*\*\*\*

以下に、2022 年度第 3 回研究例会の第 2 部でお話くださった平岡さんに、主にウクライナ学生支援会 (JSUS) の支援活動についてまとめていただいた原稿を掲載します。

なお、上述の 2 つの研究例会当日の録画ビデオおよび資料は学会 HP 上に公開しております。次回 2023 年度第 2 回研究例会は 2023 年 10 月 14 日(土)に開催予定です。内容等決まり次第、学会 HP でお知らせします。

報告

## ウクライナ学生支援会（JSUS）の挑戦

### —ウクライナ避難民支援における日本語学校の役割と提案—

ウクライナ学生支援会 代表  
清風情報工科学院 校長  
平岡憲人

#### 1. 背景と本報告の目的

2022年2月24日、ロシアはウクライナへ全面侵攻し、3月2日、岸田内閣はウクライナ避難民の受け入れを表明した<sup>1</sup>。事実上避難受け入れ体制のない我が国では、避難民の日本社会への融合<sup>2</sup>は困難が予想された。日本語学校は、日本語→就職→融合という現実を知っている。これは我々の役割だ、と感じて活動を始めた。

本報告は、海外日本語教育学会 2022年度第3回研究例会で発表した内容をまとめた報告とウクライナ学生支援会（Japanese Supports for Ukrainian Students、略称 JSUS）による支援活動の記録である。そしてその経験に基づくウクライナ避難民支援への提案である。

#### 2. JSUS と日本語学校の役割

##### 2.1 避難民支援に役立つ日本語学校の日常業務

受け入れた避難民を日本社会で孤立させないためにはどうすべきか。日本語能力を獲得させ、生活と就労を支援して自立に導き、日本社会に融合することである。それには日本語教育は必須である。ホワイトカラーとして融合するには日本語能力試験 N2 までの教育が必要である。

日本語学校は一般に留学生に対し次のような日常業務を行っている。

- ・日本語教育（文法・文字・語彙、聴解・読解・作文、JLPT/EJU 対策、コミュニケーション、日本文化理解促進）
- ・生活支援（住居確保、生活習慣指導、通信環境確保、通訳、病院付き添い、諸手続き、在留管理、危機管理等）
- ・コミュニティづくり（友人づくり、居場所づくり、情報共有、信頼感づくり、地域コミュニティや篤志家との橋渡し）
- ・自立支援（メンタルケア、アルバイト確保、自律能力指導）
- ・進路指導（進学指導、面接指導、奨学金獲得指導、情報収集）

これらはそのまますべて、避難民支援に役立った。来日支援と、就職支援、就職のための

<sup>1</sup> 「岸田首相 ウクライナからの避難民 日本への受け入れを表明」、NHK、2022/3/2、<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220302/k10013510691000.html>

<sup>2</sup> 戦争の終結によって母国に帰国する選択肢もあるが、ここでは自発的に日本と共存する道を選んだ場合を「融合」と表現する。

面接指導は追加が必要だった。受け入れ後、戦争トラウマへの対応が必要であることもわかった。

3月2日の受入れ表明後、文化庁より NGO のパスウェイズ・ジャパンが日本語学校との連携による民間ベースのシリア難民受け入れ活動をしており成果がよい、との情報を得た。そこで、有志の日本語学校 9 校で、JSUS を立ち上げ、パスウェイズ・ジャパンとの連携を進めた。

## 2.2 JSUS によるウクライナ学生支援の具体的な取り組み

JSUS は、有志の日本語学校の集まりである。日本語教育の学費を自発的に全額免除して避難民を受け入れ、生活や自立のサポートをしている。JSUS の活動は当初空席モデルであった。当時は、コロナ禍で留学生の来日が滞り、教室には空席が多数あった。空けておいたら、日本語教育を通じて社会貢献しようと始めた側面もある。来日再開後の受け入れは心意気であった。

JSUS は 2023 年 3 月までに、受け入れ有志校 40 校、来日受け入れ者数 100 人を達成した。受け入れ学生は、日本社会への適応の容易さから、大学卒業者、日本語学習経験あり、英語 B1 以上、単身者を優先し、経済力は問わなかった。JSUS の具体的な活動内容を表 1 に示した。

表 1 JSUS の活動内容

避難民向け	来日条件の提示、渡航支援、日本語学校とのマッチング、コミュニティづくり、情報提供、就職支援、奨学資金の仲介
日本語学校向け	学費の免除の呼びかけ、有志校の選抜、選考支援、渡航支援、住居支援、生活支援、情報提供、援助物資の物流、トラブルシューティング
篤志家向け	資金提供の呼びかけ、物資提供の呼びかけ、サービス提供の呼びかけ、情報の提供、感謝のフィードバック
政府向け	情報の提供、情報整理と発信の呼びかけ、在留資格の提供の呼びかけ
メディア向け	日本語学校の活動アピール、ウクライナ避難民の実情のアピール、篤志家へのメッセージ、政府へのメッセージ

日本語学校に向けては、留学生受け入れで現地送り出し機関の役割を JSUS で引き受けた。希望者の 1 次面接、日本語学校とのマッチング、現地から学校までの渡航支援などである。また、避難民には経費支弁力がない前提で本来親が担う経費は寄付や支援を集め各校に提供した。

## 2.3 有志校の選抜

受け入れに伴うトラブルを避けるため、有志校は次の学校を優先した。このことは、後に問題化したニッポン・アカデミーのようなトラブル<sup>3</sup>を招かずにすんだ理由となったと考

<sup>3</sup> 「ウクライナ学生と日本語学校法人にトラブル 学費めぐり食い違う主張」、朝日新聞、2023/2/25、<https://www.asahi.com/articles/ASR2S7KVYR2SUHNB00N.html>



えている。

- ・ 2 年間学費免除できる学校に限る
- ・ 教育経験の長い学校を優先
- ・ 多国籍の学校を優先
- ・ 都市部の学校を優先
- ・ 住居確保できる学校を優先
- ・ ロシア学生がいない学校を優先
- ・ ウクライナを支援しない国の経営陣の学校は除外

## 2.4 JSUS が受けた支援

JSUS が受けた支援には次のようなものがある。

- ・ 日本財団 渡航費支援、住居費支援、生活費支援（年 100 万円・3 年間）
- ・ 大口寄附者 用途を定めない寄付、奨学金の寄付、住居の提供
- ・ サービス提供者 住宅（民間、公営）、携帯通信、オンライン試験、オンライン教育、渡航時の伴走（ポーランド、成田）
- ・ 物資提供者 食料、生活物資、衣類、パソコン、ウクライナ国旗等
- ・ クラウド支援者 用途を定めた支援金（870 名から計 1000 万円）

中でも、日本財団の支援は大きく、活動に大きな影響を与えた。また、アパマンショップや共立メンテナンス等の民間や自治体による住居の無償提供に避難民学生は大きく助けられた。

## 3. 篤志家の活動と民間活動を円滑化するための具体的な提案

JSUS の経験に基づけば、篤志家による必要な支援は次のものである。

- ・ 渡航支援 …… 概ね 20 万円程度
- ・ 住居支援 …… 半年間の無償提供、家具などの調達費用、最大 50 万円程度
- ・ 生活支援 …… 半年間の生活費と通学費、最大 30 万円程度
- ・ 物資支援 …… 食料、衣料、家具、携帯通信、パソコン
- ・ 日本語学校支援 …… 日本語学校の学費支援（今年度から一部制度化された）
- ・ 奨学支援 …… 優秀な学生に限り、その後の進学についての学費奨学金

日本財団が行った生活費支援は、半年分程度でよかった、いや進学などのことを考えれば年 100 万円でも 3 年間必要だ、と JSUS 内でも意見が分かれている。

仕事を選ばなければたくさん仕事があるのが日本である。日本語教育と並行してアルバイトを通じて日本社会に徐々に適応しながら日本語教育を重ねて適応のレベルを上げていくという日本語学校の手法は肯定的にとらえてよいのではないか。むしろそれを避難民支援の方法とすべきと考えている。常に今回のように共感が広がるとも限らない。受け入れ数や受け入れ校を拡大・円滑化するには、今年度日本財団が募集した様に日本語学校の学費をクーポン化して日本語教育を促進してもらえるとありがたい。この制度により受け入れ校は増えている。

#### 4. まとめ

避難民の社会的統合には、生活・就労支援を中心とした日本語能力試験 N2 レベルまでの日本語教育が必要不可欠である。JSUS は日本語学校と連携しこの要請に応えている。プログラム参加者は日本語を着実に身につけつつあり、成果を上げていると評価できる。このことから、日本語学校が直接対応できない範囲、例えば日本入国までの手続き支援や、親が供給できない学費や住宅費の補助等が提供されれば、日本語学校は避難民受け入れの価値あるリソースとなりえる。

今後、受入れ学生の学習時間や到達度、進路等を分析し、本アプローチの効果を測定したい。

#### 参考文献

ウクライナ学生支援会 (JSUS)、<https://www.jsus.info/>  
パスウェイズジャパン、<https://pathways-j.org/>

報告

## 中東・北アフリカ日本語教育シンポジウム JLEMENA2023

2023年3月に国際交流基金カイロ日本文化センターの主催で中東・北アフリカ日本語教育シンポジウム（JLEMENA2023）をオンラインで開催しました。

テーマは「学習者の自律のために教師ができること ―教師の役割を考える―」、基調講演は大阪大学国際教育交流センター教授の義永美央子先生の「VUCAの時代における言語の学習・教育を考える ―オートノミーと教師の役割―」でした。参加登録者は中東・北アフリカ地域、日本など、世界中から341名を数えました。

2021年に始まったこのシンポジウムも今年で3回目です。その最大の特徴はオンラインのよさを活かし、同期と非同期を混ぜた運営形式です。2月10日から23日までのプレセッションでは、21の一般発表や11の中東・北アフリカの国・地域の発表の動画や資料をPadlet上で好きなときに見て、質問やコメントをすることができます。そして、23日には講師の義永先生をエジプト・カイロにお招きし、ハイブリッドでプレセッション特別ワークショップが行われました。続く、24日、25日のZoomを使った同期のメインセッションでは、基調講演やワークショップ、発表者によるディスカッションが行われました。もちろん、その間もPadletを使って非同期で質問をすることができます。そして、メインセッション終了後は、懇親会などを含む、後夜祭のような2日間のポストセッションを行い、シンポジウムは幕を閉じました。

このシンポジウムはPadletでアーカイブ化されているため、基調講演や発表などを見ることができます。以下のURLからぜひアクセスしてみてください。

<https://padlet.com/jfcairojlea/jlemena>

上記のPadletからは、2023年6月に発行されたJLEMENA2021の論集もダウンロードすることができます。また、年内にJLEMENA2022、JLEMENA2023の論集も発行される予定です。

みなさんが、シンポジウムのアーカイブと論集を通じて、中東・北アフリカの日本語教育について少しでも知っていただければ、ありがたいです。そして、来年のJLEMENA2024でお会いするのを楽しみにしております！

(国際交流基金カイロ日本文化センター・当学会世話人 蟻末 淳)



### 今日のアウトライン

- 転換期を生きる：VUCAの時代
- わたしのストーリー
- クリティカルな目をもつために：アウェアネスの重要性
- 母語話者主義の再考とCEFR
- 学習者オートノミーとは
- 学習者オートノミーと教師の役割
- 学習者オートノミーを育む実践
- ワークショップ



報告

## 海外の日本語学習者作成のビデオクリップ上映会

「協力隊まつり 2023」<<https://jocvmatsuri.online/>>において、海外の日本語学習者が作ったビデオクリップを上映する企画を NPO 海外日本語ネット<sup>1</sup>が実施しました。

The poster features a central yellow circle with the text: 「日本語を勉強しています！」 @世界のこんな国、あんな国. Below this are the flags of Switzerland, India, and Sudan. To the left, there is a QR code and a globe icon with the text 「協力隊 2023 まつり」. Below the QR code is the text 「おまつりHP」. The event schedule is listed as: 4月22日 11:30-12:30, 4月23日 13:00-14:00. The location is JICA地球ひろば (JICA市ヶ谷) 6階, セミナールーム600(22日) 601&602(23日). A note says ※両日とも同じ内容です. At the bottom, it says 海外の日本語学習者から届いたビデオクリップ上映会. Below the poster is a blue banner with the text: みなさま、学習者たちにメッセージや質問をぜひおねがいしますっ！ 当日会場でorイベント後Padlet上\*でお待ちします.

**トング高校 @トング**  
首都ヌクアロファにある高校で、日本語教育隊員の派遣は1987年～。現在67名の生徒が日本語を勉強している。コロナで協力隊が撤退したが、その後もトング人教師が日本語を教えている。☆ご協力くださったのは、シボラ校長

**バナラス・ヒンドゥー大学 @インド**  
ヒンドゥー教の聖地バナラスにある国立大学で、2016年～日本語主専攻あり。日本語教育隊員は去年夏に新規派遣。☆ご協力くださったのは、現在活動中の日本語教育隊員・吉田知恵さん

**「日本語クラブ」 @スーダン**  
国立ハルツーム大学の公開講座で日本語を勉強した学生たちが中心となって結成した団体。日本語教育隊員は政治情勢の悪化により2019.4～不在。☆ご協力くださったのは、モハマッドさんとシャファクさん

NPO海外日本語ネット  
\*各日イベント会場にてPadletのQRコードを提示します。

### 【上映会の宣伝ポスター】

<sup>1</sup> 「NPO 海外日本語ネット」は2008年10月から活動開始。「海外で頑張っている日本語教師や日本語学習者の役に立ちたい」との思いから、2002年4月にJICA海外協力隊の日本語教育隊員OVによって設立された「海外日本語学習支援協会」の意志を引き継いでいる。現在(2023年6月)、協力隊員として海外のさまざまな教育機関で日本語を教えた経験をもつ78名が参加し、日本語教育に関する情報の共有および支援に繋がる活動を行っている。

NPO 海外日本語ネットは、「協力隊まつり」の来訪者に JICA 海外協力隊の日本語教育隊員が派遣されている日本語教育の現場に触れてもらい、隊員の活動を知ってもらうことに加えて、海外の学習者に日本語を使うインセンティブを提供すべく、日本語学習者が日本語で作ったビデオクリップの上映会を開催しようと考えました。そこで日本語教育活動の一つとしてビデオクリップを作りたいという隊員を国際協力機構(JICA)青年海外協力隊事務局の協力のもと募ったところ、インド・バラナシで活動中の吉田知恵さんからビデオが届きました。「インド BHU (バナラス・ヒンドゥー大学) の学生とゆくバラナシ巡り」というタイトルがつけられ、北インドの聖地バラナシの街の散策が楽しめる作品でした。

上映会ではこのビデオと共に、トンガ高校の学校紹介や学習者たちの自己紹介からなるトンガ作品と、教師不在の状況下での学習者たちのたくましい活動の様子がわかるスーダン作品を上映しました。NPO 海外日本語ネットは会場の参加者から寄せられた感想や質問を学習者たちの元に届け、彼らの元から遠心的な力強いベクトルが誕生することを期待しています。

これら3本のビデオは、学会 HP と学会 Facebook 上で7月下旬に公開予定です。また、インド作品に関する記事も掲載予定です。記事では、ビデオ作りによって「私たちの日常が楽しくて意味深くなってきた」、ビデオ作りは「素晴らしい学習体験だった」などと語ってくれたバナラス・ヒンドゥー大学の学習者たちの日本語学習の背景や環境について、そして“素晴らしい学習体験”を仕掛けた演劇科出身の吉田知恵さんのハタラキなどを紹介しています。

(NPO 海外日本語ネット・当学会世話人 内山聖未)

## 『海外日本語教育研究』 投稿規定・執筆要領

### 投稿規定

#### 1. 投稿方法：

投稿は会員であり、かつ申し込みの時点で当該年度の会費納入が済んでいる方に限りま  
す。共著論文の場合は筆頭者が会員である必要があります。投稿を希望される方は、学会  
ホームページ上にある投稿申し込みの受け付けフォームからご送信ください。投稿申し込  
みの受け付け期間内に論文題目を届け出た方に、学会誌委員会から投稿承認の通知ととも  
に論文のひな形を送付いたします。本誌は年2回刊で、投稿スケジュールは以下のとおり  
です。

※2023年度下半期号から以下のスケジュールに変更します。

<上半期号>投稿申し込みの受け付け締め切り：3月末日 23：59（日本時間）まで。

投稿締め切り：4月15日 23：59（日本時間）まで。7月末刊行予定です。

<下半期号>投稿申し込みの受け付け締め切り：9月末日 23：59（日本時間）まで。

投稿締め切り：10月15日 23：59（日本時間）まで。1月末刊行予定です。

#### 2. 内容：

海外の日本語教育に関する「教育方法」「カリキュラムデザイン」「教材」「評価」「言語  
習得」「教育史」「言語（教育）政策」等の研究論文で、未発表のものに限ります。他学会  
誌等との二重投稿は受け付けられません。

#### 3. 使用言語：日本語を原則とします。

#### 4. 原稿料：お支払いしません。

#### 5. 審査：

投稿原稿は、複数名の査読委員による審査を受け、その結果を学会誌委員会に取りまと  
め、投稿者にお知らせします。審査結果は「採択」「条件付き採択」「次号以降への再投稿」  
「不採択」の4つで、「条件付き採択」の場合は、所定の期間内に修正を加え、査読委員の  
確認を経て、当該号に論文が掲載されます。また、査読結果によっては研究例会での発  
表・報告をお勧めすることがあります。

#### 6. 発行：

本誌に掲載される論文はオンラインジャーナル、ならびに冊子体で公表されます。また、  
テーマ別や国別などで再編集して発行する場合があります。

#### 7. 原稿送付先、および投稿に関してのお問い合わせ先：

投稿はE-mailでのみ受け付けます。また、投稿の方法に関するお問い合わせは以下の連  
絡先で常に応じます。本誌への投稿をお考えで、研究トピックについてご相談のある方は、  
十分な時間的余裕を持ったうえで、各号の投稿申し込みの受け付け期間以前に、学会誌委  
員会までご連絡ください。投稿受け付けの締め切りが近づきますと、次の号への投稿をお  
願いする場合があります。E-mail [kgnk.info@gmail.com](mailto:kgnk.info@gmail.com)（学会誌委員会）

## 執筆要領

### 1. 投稿原稿の構成：

投稿原稿は、次の要素から構成されるものとします。この順序で書いてください。

- 1) タイトル（副題をつけることも可能）
- 2) 要旨（日本語 400 字以内）
- 3) キーワード（原稿中の主要名詞句 20 字以内を 5 つまで）
- 4) 目次（見出しを 2 段配列で）
- 5) 本文（図表を含む）
  - ①章・節・項構成は 3 階層までとします。
  - ②注は、脚注とします。
- 6) 参考文献一覧
- 7) 著者紹介

### 2. 投稿原稿の書式・分量：

- 1) 分量は資料等を含め 18 ページ以内で横書き。
- 2) 1 ページは A4 版横書き 43 字×36 行。
- 3) 本文は明朝体、タイトルと見出しはゴシック体、欧文（英文字の略語も含む）は半角文字を使用し、欧文の書体は century。
- 4) 接続詞および接続詞に類するものは、原則としてかな表記。  
例)「従って→したがって／例えば→たとえば」など。
- 5) 補助動詞はなるべくかな表記。  
例)「～してみる。／～していく。」など。
- 6) カタカナは全角入力。
- 7) 数字はすべて半角で、算用数字を使用。
- 8) 数、時間、順番を表すときは、1 人、2 つ、3 時、4 回、5 位、10 日など、算用数字を使用。1000 以上の数字は 3 ケタごとに「, (カンマ)」を入れてください。  
例)「1,000／189,125」など。ただし、年号表記（原則として西暦）は、「1998 年／2002 年」などとカンマなし。
- 9) マル数字の使用は可能です。
- 10) 「!」や「?」「/」「- (ハイフン)」「“ ”」、括弧類は全角。
- 11) 「!」「?」の後ろは全角アキ。
- 12) 句読点は「,」「。」で統一。
- 13) ルビは、原則なし。
- 14) 図表・イラストを引用、転載する場合は、投稿者があらかじめ著作権者から転載の許可を得ておいてください。また転載する際は、原本の著者名、出版年、転載箇所頁も明記してください。図のキャプションは下部に中央揃えとし、表のキャプションは上

部に中央揃えとします。

- 15) テキストから長文の引用をする場合は、改行し全体を2字分下げてください。ルビや表記は、オリジナルに従うことを原則としますが、読みやすさを考慮して変更も可能です(変更して引用する場合は、事前に許可を得ておいてください)。直接引用の場合には、引用箇所の該当頁数を明記してください。

出典は以下の要領で表記してください。

著者名・出版年、『書名』・出版社名、または「論文題目」・『雑誌名』・該当頁

- 例) 佐久間勝彦(2006)「海外に学ぶ日本語教育 - 日本語学習の多様性 -」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈 - 学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性 -』アルク, 33-65

高嶋幸太・関かおる(2014)『その日本語、どこがおかしい? : 日本語教師のための文型指導法ガイドブック』国際語学社

吉田一彦(2001)「埋め込み文をともなう形式「〜とき」の名詞句性と時間関係を標示する動詞述語形式-teiru/teitaの交替」『横浜国立大学留学生センター紀要』8, 19-64

そのままの引用ではなく、少し変更を加えている場合も、上の要領で「……を利用」という形で注に出典を入れてください。

URLの場合は、ページタイトル・<URL>および参照した年月日を明記してください。

- 例) 日本語教材<<http://www.kaigainihongokyouiku.co.jp>> (2005年10月2日)

### 3. 参考文献について :

1) 言語別に分けて、著者の名字をアルファベット順で全部並べてください。

2) 欧文文献に関して

①書名(副題も含む)は斜体。

②副題はコロンのあと。

③以下の順で、例のように記入してください。

著者名・出版年、書名・都市名 : 出版社名、または論文題目・雑誌名・該当頁

例) Sapir, E. (1921). *Language: An introduction to the study of speech*. New York: Harcourt, Brace & company.

3) 和文文献については、前記引用の箇所を参照してください。

4) 共著の場合、和文文献は「・(中黒)」で、欧文文献は「, (カンマ)」でつないでください。

\*原稿の体裁や表記法が執筆要領と異なる場合、受理されない恐れがありますので、ご注意ください。



4. 著者紹介について：

氏名（ふりがな付き）と、主な海外教授活動情報を最大5つまで掲載できます。ただし、固有名が特定されないよう、教育機関の種類や特徴のみを明示することとします。

表記例：

【主な海外教授活動の場】

トンガ・政府中等教育機関 2000.12～2002.06  
マレーシア・民間語学学校 2004.06～2008.02  
タンザニア・政府高等教育機関 2009.08～2010.07

以上

## 編集後記

本号の巻頭辞は「いまこそ、人々の『発展』よりも人々の『幸福』に寄与する“海外日本語教育学”を」と力強く結ばれています。学会誌委員会としましても、この学会誌が「“海外日本語教育学”らしい視座を持った研究や議論」の場となることを目指し、「現場ならではの視点」を大切にされた内容をお届けできるよう精進してまいります。みなさまからのご意見ご提案、ご指摘など、お寄せいただけたらうれしいです。

本号における論文の投稿状況をご報告します。投稿申し込みのあった6本すべてが締め切りまでに投稿されましたが、残念ながら掲載は叶いませんでした。今後のご投稿をお待ちしています。なお次号より投稿スケジュールが変わりますので、「投稿規定」をご確認ください。

	海外日本語教育研究 第16号
発行	2023年6月30日
発行	海外日本語教育学会
編集	海外日本語教育学会 学会誌委員会
表紙デザイン	鶴澤威夫
本文デザイン	海外日本語教育学会 学会誌委員会
HP	<a href="http://kg-nk.jimdo.com/">http://kg-nk.jimdo.com/</a>
Facebook	<a href="https://www.facebook.com/KaigaiNihongoKyouikuGakkai">https://www.facebook.com/KaigaiNihongoKyouikuGakkai</a>

海外日本語教育学会